

佐藤清郎著 『わが心のチェーホフ』

(以文社 2014)

安達紀子

「チェーホフで始まり、チェーホフで終わる結果となりました」とあとがきにある。1966年に出版された『チェーホフの生涯』を始めとして5冊ものチェーホフについての大著を世に送り出した佐藤清郎氏が、チェーホフの倍以上生きて94歳になった年、ふたたび『わが心のチェーホフ』(2014年)を上梓した。ロシアや日本の研究者や作家のチェーホフ論の検証、幾つかの作品の分析、書簡や『手帖』および同時代人の回想録からの引用を通じて、チェーホフの全体像を浮かび上がらせる。

著者はチェーホフのことを「大いなる常識家」と名づけているが、佐藤氏のチェーホフ論も常識に則って、オーソドックスに、実証的に書き進められる。チェーホフ同様、「抑制」をきかせて書き綴られているため、読む者からさまざまな考えを引き出す、示唆に富むエッセイになっている。

同時代人から思想を持たない作家と非難されがちであったチェーホフの思想の在り方について、著者は研究者や同時代の作家の言葉を引用しながら論考を重ねる。チェーホフは広瀬和郎が述べたように「徹底した自力教」を持っていたし、ゴリキーが語ったように「世界観より大きな何か」「独自の人生哲学」を持っていた。すなわち、チェーホフがその観察眼を通じて描いた人生の諸相には、思想よりも大きく、思想よりも広がりのあるものが示唆されているのだ。

チェーホフの思考、精神形成に大きな影響を与えた人物としてダーウインやクロード・ベルナールの名前を挙げる人はたくさんいるが、ストア哲学者マルクス・アウレリウスが記した『自省録』のチェーホフに対する深い影響を(研究者ロスキンの指摘はあるものの)著者はど頻りに詳しく指摘している研究者はいな

い。アウレリウスはチェーホフの「心の支え」であったと同時に、作品の中にも多数引用されている。著者が指摘するように『六号室』の医師ラーギンの言葉の中にもアウレリウスの思想が投影されている。とはいえ、ラーギンの考えがその患者グローモフによって反駁され、最後にはラーギン自身が六号室に投げ込まれ、やがて死んでしまうことを考えると、チェーホフがこの哲学者の思想を万能のものとはみなしていない、とも受け取れる。しかし、著者は決して結論を出してしまったりはせず、次のように指摘する。

「ストイックな」理想主義に立つストア派の哲学の信奉者ラーギンと、あくまで現実主義的な生活者の視点に立つグローモフを秤にかけてはいますが、作者はどちらにも軍配をあげてはいないのです。チェーホフの言葉で言うなら、読者の前に両者を「提示」したままです。

「君が何か外的な理由で苦しむとするなら、君を悩ますのは、そのこと（苦痛）自体ではなくして、苦痛についての判断だ。判断は君の考え一つでたちまち抹殺できる」と説くアウレリウスの思想は実生活の具体的条件、人間の関係性の中でさまざまに受容されるものなのだ。「チェーホフの場合は思想よりも思想を持った『人間』が重要なのだ」という研究者ミハイル・グローモフの指摘に著者は深く賛同する。著者の論述を読み進むと、たしかに書物の中には体系化された思想が固定された形で記されているが、身体を持った人間の精神の中に存在する思想は、人生の与えられた状況、人間関係の中で多種多様に受け止められ、他者の思想との共鳴のなかで多彩な響きを奏でる、ということが理解される。思想はあくまでも人間から独立しては存在しえないものだ。

著者は作家の死生観がその人生観に通じるものだと考え、チェーホフが結核を患っていたことに注目する。自らもこの病気を患っていた著者は、「死はおそろしいものではなく、日常の同伴者でした」と述べ、チェーホフも「死」を「自然法則」と同じように「素直に」受け取ったに違いないと推察する。この指摘は正しいものだが、死を日常の同伴者とみなす境地に達するまでには容易ならぬ道程があったに違いない。本書で主に取り上げられているチェーホフの作品『ともし

び』『退屈な話』『六号室』『黒衣の僧』『三人姉妹』『桜の園』にはすべて死が影を落としているし、現世のはかなさ、虚無主義、「空の空」という考えとの対峙がくっきりと見てとれる。死を内包しつつ生きていたことがチェーホフの文学に及ぼした影響は非常に大きい。人間は誰しも一歩一歩、死に近づきつつ生きているが、ごく若いころから身体レベルで死を感じている者と、そうではない者との間の差異は著しく大きなものなのだ。

ブーニンもゴーリキーも、チェーホフが「高い視点」に立っていたことを認めているが、著者は高い視点に立っていたからこそ、チェーホフは距離をおいて対象を見ることができた、と指摘する。この達観とも言える高い視点は、チェーホフが「平静に」ものを見ているからこそ生まれたものなのだ。そして、「高い視点」「平静心」は、チェーホフの幼少期の苦勞、若いころから間近にあった死と無関係ではない。また、高い視点は、チェーホフが医者として患者を診るなかで養われていったという面もあるに違いない。チェーホフは医者であると共に、彼自身が病人であった。著者が執拗に引用した「医者は病気を治すのではなく病人を治すのです」というチェーホフの言葉は、作家の眼が何よりも「人間」に向いていたこと、作家が医者および苦悩する病人という二つの視点に立ち得たことを示唆している。チェーホフが登場人物たちを批判と同情の目で見ていたことは誰もが指摘することだが、著者はとくにチェーホフの寛容さを鋭く感じ取っている。『黒衣の僧』において、誇大妄想の末死んでいく主人公コヴリンが「幸せそうな微笑」を浮かべていたことに著者は注目する。

この「微笑」こそ大切なものです。それが全体を両の手で支えています。「誇大妄想」をも「許して」いるのです。

チェーホフのまなざしには、往々にして「許し」がある。チェーホフは「観察」し「問題提起」をしても、決して「裁く」ことはないし、結論を出してしまうこともない。

著者および多くの人たちが指摘するように、チェーホフは『ともしび』の中で「この世のことは何もわからない」と記した。彼は「空の空」「諸行無常」「どら

ちみち死ぬのに」「何のために生きているのか」という考えとつねに真っ向から向き合ってきた。その一方で、『三人姉妹』のチェブトイキンをはじめとして「どっちでも同じことさ」と繰り返す人物たちがいる。著者はこの言葉に対して興味深い、逆説的な解釈を施している。

「文明、進歩、文化と呼ばれている階段をどんどん上って行きなさい。[……]でもどこへ行くのか分かりません。でも階段のためだけにでも、のぼって行きなさい」と『手帖』にあります。これは、「すべての学説は仮説にすぎない」(クロード・ベルナール『実験医学序説』)ことを知っていたことと無縁ではないでしょう。「どっちでも同じことさ」は、根ぶかい所でこの信念と結びついていると思います。

『手帖』にある「階段」についての言葉を著者は何度も引用する。この言葉は、チェーホフが「変化」「進歩」「新陳代謝」を重んじたという指摘とも結びつくものだろう。また、死が「日常の同伴者」だったからこそ、チェーホフがその対比として「生」を鮮烈に感じ、「生」に向かっていたことも容易に理解できる。このこととも関連して著者が引用した、加藤周一氏の『三人姉妹』についての言及は非常に意味深い。

「命短し」だから生きているうちに、殊に若いうちに、愉しもうという思想は古今東西に無数の例がある。しかしそれは「命短し」への抵抗ではなく、その「受容」である。

著者は『三人姉妹』の主題は「命短し」ではなく、「俗的で停滞的な小市民生活からの脱出願望」だと反論しながらも、「受容」という言葉を重く受け止める。チェーホフは病気や死を「受容」することによって、彼の言う「階段」をのぼることができ、ひいては「高い視点」を獲得することができたのだ。

さらに著者は、親鸞の「自然法爾」とチェーホフが何度か作品の中で用いた言葉「自然法則」を比較する。自然法爾のさまざまな解釈に言及した上で、著者は

「自然」の背後に如来の影を感じ取って、ここに徹底した「お任せ」の姿勢を見る。それに対して、チェーホフの「ぼくは死ぬ」は、「納得と諦観が一つになり、静かに自然法則に身を任せたもの」だと述べる。

広津和郎がチェーホフの特徴のなかに「無限への回帰」をとらえたこと、神西清がチェーホフの思想の中に「永劫回帰」を認めたことを著者は肯定する。チェーホフは遠い過去から果てしない未来へと向かう壮大なる悠久の時の流れ、巨大なる宇宙の存在を感じていた作家だ。しかし「チェーホフはあくまでも『有』の世界で思考した」と著者は主張する。

有限の生が、果てしない無限の流れの大切な一コマであることを知る眼は、当然ながら寛容の優しさを帯び、「今」の瞬間の生をいとおしむことを知る眼でもある。

こう語る著者はチェーホフの妻宛ての手紙の言葉——「この世のことはすべてより良いことにつながっているんだよ」——を引用する。チェーホフ作品にためたうほのかな明るさの秘密は、このへんにもあるのだろうか。

チェーホフはその作品だけでなく、彼の生き方、考え方、その生涯そのものも立派な作品なのだ、ということを書き教えてくれる。また、本書の最初の章に広津和郎のことが、最後の章に神西清のことが語られていることも興味深い。著者は日本におけるチェーホフ研究の先人たちの研究を検証して後の人たちに繋ごうとし、本書によってチェーホフ研究の鎖の重要な部分を完成させようとしたのだ。この鎖はチェーホフ作品のフィナーレ同様、開かれたまま作品の窓から洩れるともしびれとさまざまに響き合い、交錯しつづけることだろう。